

TOPPOS TOKIWA POST

VOL. 22
SUMMER

常磐大学
■大学院 ■国際学部
■人間科学部 ■国際学部
■コミュニティ振興学部
常磐短期大学

常磐大学高等学校
常磐短期大学 附属幼稚園

[2001.6.29.]

発行/学校法人 常磐学園 ■編集/学園報編集室 水戸市見和1丁目430-1 電話 029(232)0007 http://www.tokiwa.ac.jp/

常磐大学 生涯学習センターオープン



← 直筆の看板を設置する理事長とセンター委員、受講生

学生のキャリアアップにも役立つ 社会に開かれた学習システム誕生

地域社会における、大学の役割とは何か。その問いに対するひとつの答えとして「生涯学習センター」がオープンした。人生のキャリアアップに、資格取得に、学生を含め、たくさんの人たちの活用を期待したい。

興味のある分野についてさまざまなことを知りたいと思うことは、年齢や性別、また職業などに関係なく誰にでもある欲求だ。しかし、そんな知識を誰もが身に付けることのできる環境を整えられているかというと、行政や一部の民間団体が行っているのは、まだまだ充分とは言えない。



→ 初日の講座「茨城の文学と歴史」常陸国風土記」を聴く

そこで、大学が持つ学術資源を地域社会の人たちに提供しようというのが、平成十三年五月二十三日にオープンした「常磐大学生涯学習センター」だ。オープン当日は、諸澤正道理事長ほか、企画段階から活動してきたセンター委員会のメンバーが集まり、諸澤理事長直筆の看板設置が執り行われた。

平成十三年度に設置された講座は、教養・語学・資格取得・パソコン・高校生講座など全部で十五講座。すでに受講生の募集を開始している講座では『英検二級合格講座』と『楽しいパソコン入門』に人気が集まり、五月二十二日現在で定員オーバー。嬉しい反面今後の対応が慎重に検討されている。

「本学は、もともと『生涯学習センター』に非常に適した環境が整っています。それは、生涯学習の専門家がいます。人間科学部やコミュニティ振興学部には、自治体レベルで生涯学習に携わってきた先生方が、たくさんいらっしゃいます。そういった先生方が現場で培ってきたキャリアを活用し、理論と実践の両面から生涯学習に取り組むことができます。」

◎シリーズ22 クリンソウ

武士たちが品種改良に興じた花



常磐の四季

サクランソウ科の多年草。山麓の湿地に自生します。九輪草の和名は、花が多数輪生して何段にもつくことからつけられました。その名が示すように長い花茎の先に小さな花が一五段の輪を作って咲きます。葉は托葉がなく根生し、単葉で倒卵形。腺毛を有する葉には粉状のプリミンという有毒成分があり、人によってはかぶれを引き起こします。花色は紅紫色系、白色、黄色などがあり、約六〇種が北半球の温帯から寒帯を中心に分布します。

花形がサクラに似ていることからついた分類名で、品種改良が盛んに行われました。園種のプリムラは、クリンソウ、アツバサクランソウ、ケシウザクラなどが有名です。日本では江戸時代の中頃から、荒川の原野に野生するサクランソウから栽培が始まり、白、桃、紅、紫、絞りなどの色変りや、大きささまざまな花形の変わり品が生まれ、名称をつけて品評されました。栽培者は旗本や御家人など武士階級が多く、新品種の作出を競い合ったとか。現在栽培される約一五〇品種のうち、半数以上が江戸時代からの株分けで伝えられたものだそうです。

海外研修セミナー開催

英語だけのレクチャーで アメリカの雰囲気模擬体験!

第四回を迎える国際学部海外研修のセミナーが行われた。今回は研修先であるカリフォルニア大学・アーバイン校より外国人対象英語プログラムマーケティング部長のシンシア・ナグラさんをお招きし、よりリアルな説明会が展開された。

海外の雰囲気伝わる セミナーを展開

国際学部には、海外体験をした学生に単位を認める制度がある。その目的は、生きた外国語を学ぶための語学研修と、世界で通用する国際的なバランス感覚を身に付けること。海外研修は、一カ月間という短期間ではあるが、海外の大学やホームステイなど、日本では得ることのできない貴重な体験を多くの学生たちに提供している。

毎回、研修先として協力していただいているのはアメリカ・カリフォルニア大学アーバイン校(UCI)。今回で第四回を迎える海外研修に先がけて、このUCIより生涯教育部・外国人対象英語プログラムマーケティング部長のシンシア・ナグラさんをお招きし、研修希望学生を対象としたセミナーを平成十三年五月九日に開催した。

シンシアさんのレクチャーは、基本的にすべて英語。アメリカ、カリフォルニア州の紹介からUCIとはどんな大学なのか、また実際に行われる英語研修プログラムの内容などを説明していただいた。

海外生活で最も重要なことはコミュニケーションだ。そのことを参加希望者にも伝えようとしているのか、シンシアさんはレクチャーの間にも「あなたがアメリカで学

びたいのはなぜ?」「プログラムの内容でもっと知りたいことは?」などと次々と英語で質問。なかなか答えられない学生に対して「アメリカの大学では先生より学生のほうが発言します。だから今回の海外研修では大学の授業はもちろんだ、ホストファミリーとも、まず自分からどんどん話しかけましょう」とアドバイスしていた。

このセミナーには、平成十三年二月三日から三月六日の日程で行われた第三回海外研修の経験者も数多く参加。国際学部三年の塚本佳奈子さんは「実際に海外研修に行った人たちの体験談は、これから参加する人たちにとってとても役立つ情報だったのではないのでしょうか。また英語だけのレクチャーを受けることもいい試みだと思います。

私自身、海外研修に参加して価値観が変わり、人間性も豊かになったように思います。みなさんも、このチャンスをお逃さず参加してください」と、後輩たちにメッセージを送り、国際学部三年の高田順子さんは「シンシアさんのセミナーを受けているうちに、三カ月前の研修体験を思い出しました。初めての人にも、海外生活の雰囲気がよく伝わったのではないのでしょうか。短くはいえ、三十日間の海外生活は学生でなければなかなか経験できない良い経験です」と語っていた。

第四回海外研修に参加する学生たちの成果が期待される。



→英語での対話を基本としたシンシアさんのレクチャー

Campus Report 1



↑バイキング形式の食堂「ピビン」



↑盛大に行われた研修修了式

学長インタビュー／創造発展委員会

全学的に同じ問題意識を持ち 教育・研究環境を改善

大学は時代の流れとともに変化している。その変化を「進化」という次元に高める組織、それが「創造発展委員会」だ。委員だけの閉ざされた空間ではなく、学生・教職員のすべてに開かれたスタンスで行われる改革に、大いに注目しよう!

キャンパスライフを 快適にするために

本学には「創造発展委員会」という組織がある。平成十二年七月に設置された委員会だが、その母体となる組織はすでに平成八年から活動を開始し、数々の事業を推進している。

その実績は、ときわフォーラムの開催、オープンキャンパス、ホームページの更新・維持、就職セミナーの実施、他大学との単位互換制度の導入などさまざま。こうした一連の活動は、大学としての教育・研究活動を充実させることを目的とし、そのすべてがキャンパスライフと密接なつながりを持っている。

オープンな環境から 民主的な改善を

「大学とは高等教育を提供するサービス業だと私は考えています。ですから、在学生はもちろん、保護者の方々や卒業生たちの満足度を高め、地域社会における大学の存在意義を確立させる必要があります」

常盤大学設立当初から続く諸澤英道学長のこうした考え方が、その背景にはある。設立当初というといまから約二十年前。現在では多くの教育関係者が同じ考え方を持っているが、当時としては非常に革新的な考え方だ。「また充実した高等教育を提供するためには、



←学内環境の改善を進める諸澤学長

大学の変化を捉えなければなりません。学生、教職員、また大学を取り巻く社会環境の変化のなかに、新しい問題点が発生する。そこで、議論を尽くし全学的に同じ問題意識を持つことで学内の環境が改善されると考えています」

これを実践したのが平成十二年七月に行われた「キャンパスライフの実態と満足度に関する調査」。全学生を対象に学生の大学への期待や要望、現状に対する満足度を調査するアンケートだ。ここで確認された問題を、施設・設備関連、授業・教員/教学関連、事務職員対応・事務局関連、学生生活・マナー関連の四つに大別し、ワーキンググループでそれぞれの課題に取り組みむことで、改善に向けての具体策を打ち出している。

「今後、こうしたキャンパスライフでの学生たちの満足度調査は定期的に行う考えです。また、個人的にも学生や教職員からのリアルな情報を大切にしたいですね」

諸澤学長は、学生との会合を最優先でスケジュールリングし、できる限り出席するように努めているという。また、最近では学生から直接、Eメールが送られてくることもある。

「常にオープンにしていけないと情報は入ってきません。私自身、そういうスタンスがすぎなんです。誰もが自分の意見を発言する機会を持ち、それに対してみんなで考え議論する...『創造発展』というクリエイティブな試みには、風通しのいい環境が必要ですよ」

トップダウンではなく、あくまでも自発的、民主的な学内改善を「創造発展委員会」は推進している。



→リニューアルされた購買部(右)とブックセンター(下)

Campus Report 2



Circle Flash!

としては欠場したが、先輩の加藤ドライバー率いる常盤大学チームが総合優勝。全国の学生が大学の名を賭けてエントリーする熱いレースだけに、今年こそ総合優勝を目標に着々と準備を進めている。



http://www.page.sannet.ne.jp/heeltoe_tokiwa/

チーム全員が主役。サーキットは感動のステージだ!

ピットに立ち込めるオイルの匂い、体で感じるエンジンの響き、スピードへの挑戦がひとつにするクルードライバーの心の鼓動。レースには参加した者しか知らない特別な魅力がある。その魅力にとりつかれた学生たちが集まるのが、自動車部だ。一昨年に行われた、第一回エビスサーキット学生祭四時間耐久レースで大排気量クラス優勝。昨年はレースカーの調達が間に合わず自動車部

Circleサークル紹介Flash!

第6回 Heel & Toe (自動車部)

活動内容は、エビスサーキットの四耐を中心に、エントリーの資金調達も兼ねたジムカーナを年四回主催。トレーニングは、大洗サーキットで月二回のカート練習と、アスレチックルームで週一回のポデイトトレーニング。部員数は現在三十名、女子に限りレースやコンパなどイベントだけに参加する部員も募集している。「走りも遊びも広く深く」が自動車部のコンセプト。大学生の今しできないことがやりたいんです」国際学部四年の鈴木孝英部長は、部活とサークルの中間を目指している。でも、レースに賭ける思いは決して遊びじゃない。

「十一月のエビスサーキットでは必ず優勝します。今年はレース用車両も購入しましたし、スポンサーの申し込みも来ていますから」主催するジムカーナの参加募集から活動のプレゼンテーション、そしてスポンサーの獲得などは、すべてネット上で行われる。自動車部はこのインターネットもひとつの武器にして、「常盤大でいけば自立」ことを狙っている。まだまだ書き切れない自動車部の魅力を知るには、情報満載のホームページをのぞいてみよう!

活動内容は、エビスサーキットの四耐を中心に、エントリーの資金調達も兼ねたジムカーナを年四回主催。トレーニングは、大洗サーキットで月二回のカート練習と、アスレチックルームで週一回のポデイトトレーニング。部員数は現在三十名、女子に限りレースやコンパなどイベントだけに参加する部員も募集している。「走りも遊びも広く深く」が自動車部のコンセプト。大学生の今しできないことがやりたいんです」国際学部四年の鈴木孝英部長は、部活とサークルの中間を目指している。でも、レースに賭ける思いは決して遊びじゃない。

活動内容は、エビスサーキットの四耐を中心に、エントリーの資金調達も兼ねたジムカーナを年四回主催。トレーニングは、大洗サーキットで月二回のカート練習と、アスレチックルームで週一回のポデイトトレーニング。部員数は現在三十名、女子に限りレースやコンパなどイベントだけに参加する部員も募集している。「走りも遊びも広く深く」が自動車部のコンセプト。大学生の今しできないことがやりたいんです」国際学部四年の鈴木孝英部長は、部活とサークルの中間を目指している。でも、レースに賭ける思いは決して遊びじゃない。



←秒単位の世界で戦ったピット作業

CT Campus Topics!

新型幼稚園バス納車 幼稚園前広場

草原で遊ぶカワイイ小犬たちがイラストで描かれた、素敵な幼稚園バスが平成十三年五月三十日に納車され、交通安全祈願および清祓が行われた。交通安全祈願が行われたのは水戸八幡宮。高部和子園長はじめ関係者が出席し、これからは園児たちが楽しく安全に通園できるよう祈りを捧げた。その後は学園内に戻り、幼稚園前広

場でバスのお清め。好天に恵まれた広場には、学長、副学長、短期大学学部長などの幼稚園関係者、また、PTA会長、副会長など保護者代表の皆様にもお集まりいただき、神主が行う四方被などの儀式が行われた。約八十名ほど集まった園児たちも、見慣れない神事に、少し緊張しながらも興味津々の様子。最後に諸澤学長と高部園長がバスのタイヤにお神酒をかけ、お清めの儀式は滞りなく終了した。

一連の神事が終わった後は、いよいよ園児たちお待ちかねの試乗会。それまで厳重な雰囲気戸惑いがちだった園児たちも、いつもの元気な姿に戻っておおはしゃぎでバスに乗り込んだ。本来は、乗り込むだけの試乗会の予定だったが、園児達の喜ぶ笑顔に負けてエンジンも始動。幼稚園前広場の敷地内を実際に走る一幕も見られた。



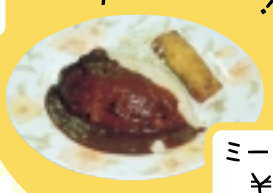
イラストが大きく描かれた幼稚園バスの効果は、園児たちの通園を楽しくするだけではない。一目で幼稚園バスであることが分かるため周囲のドライバーに安全を促す目印にもなる。道路が込み合う時間帯での送り迎えは今や、なくてはならない外装なのかも知れない。バスの定員は幼児三十九人、大人三人。見晴らしのいい大きな窓は、開いたときに危険に思えるが、実は全開できないようにストッパーが組み込まれるなど安全対策も万全に施されている。今後、千波方面コースと大工町方面コースの二コースで、園児たちの元気な笑顔を乗せて走ることになる。

お昼のオアシス 学生食堂へ行きよう!

いちばん人気の高いメニューは、なんといつでも学食の王様「カレーライス」。他のオーバーライスものも比較的注文が多く、「ビーフシチューライス」も今や定番になりつつある。それから、学生ホールの特別メニュー「牛丼」も人気急上昇。安くて手軽でも美味しい、まさに学生にピッタリのひとつだ。でもたまには、栄養のバランスがとれた定食のものオーダーしてね。



カツカレー ¥420



ミートライス ¥350

キャンパスのオアシスといえは、やっぱり学生食堂。現在、メインで営業しているのは五百二十人収容できる1棟の食堂。そして学生ホールに設置されたオシャレなカフェテリアも女子学生に好評だ。ここところ利用者数も上昇し、メニューも評判の高い学生食堂、その人気の秘密にせまってみよう。

べられる。「いかに低コストで美味しい料理を提供するのがポイントです。学生さん



←天井も高く開放的な学生食堂(1棟)

んの中には、財布に余裕のない方も多いですから」江橋芳治さんは、昨年十二月から本学学生食堂の店長を務めている。店長として最初に行ったのは、値下げとメニューの見直し。学生のニーズを充分に考慮した計画だ。「ランチタイムを有効に使うためには、手軽に早く食べられるものがないですよ。例えば、カレー・シチューライスなどオーバーライスものや、麺類などに人気を集めるのもそのせいでしょう」また1棟は、カレー、ラーメン、丼ものなどボリュームを重視し、学生ホールはパスタを中心にメニューを構成するなど、それぞれの特色を活かした食堂づくりも行われている。「学生さんは新しいものに敏感なので、流行に遅れないようメニューの見直しを図っていく考えです。これから新メニューの登場に期待しよう!

このごろなんだが日本がヘンだ。利益の追求をいっばんに考える大人たちちよつとしたことで犯罪をおかす、キレる若者たち...この国の未来に「希望」なんてあるのだろうか。でもちよつと待って、あきらめる前に吉永先生の話を聞いて...

■コミュニティ振興学部 吉永 宏教授に聞く — ボランティア・市民活動 —

君が探している「希望」はもう一人の自分の中にある

どうして人のために自分は動くのか

いきなり「人のため、社会のためにボランティア活動しましょう」と言われても、なんだかピンとこない。なぜ人のためにしなくちゃいけないのか、社会のためになることって...。そもそも知ってるようでよく分らない「ボランティア」って何なのか、そこから吉永先生にお話を伺おう。



昔は家族の中、地域の中に定着していました。ところが戦争が終わると核家族が進み家族がバラバラ。人も都市に集まることで地域のつながりが希薄になった。そしてそこにあつたはずの「助け合いのきずな」が無くなつてしまつたんです。それを意識的に取り戻す動きを、ボクはボランティア活動・市民活動と呼んでいます。

だから「ボランティア活動がある社会は変な社会」だという。つまり、本当は助け合わなくちゃ生きていけないのに、助け合おうとしないからボランティアが必要になる。ひとりじゃ絶対に生きていけない孤島などで生活している人たちは、ボランティアなんて知らない。口うる当たり前に行っていることに「ボランティア」なんて特別な名称は付けな



Profile よしなが ひろし 広島大学文学部哲学科修了。専門/市民活動・ボランティア・NPO論。●日本ボランティア学会監事、日本青少年育成学会運営委員、(財)たんぼほの家理事、芸術とヘルスケア協会副代表。著書「響き合う市民たち」他

でも「奉仕活動を行なうければならぬ」と強制的にされると「反発する気持ちもわいてくるし、人のためにすることをイヤイヤも決して人のた

めにはならない。だから、自分が充分に納得して自分から発信する。それがボランティア活動の第一歩なのだ。

「阪神淡路大震災のとき、いわゆる「かけつけボランティア」のコーディネートをしていました。そこで統計をとってみましたが、約百二十万人のボランティアのうち六十パーセント以上が二十四歳以下の若者。そのほとんどが、テレビなどの映像で災害の現状を知ったか、直接見てきた知り合いの話を聞いて集まった人たちで、もちろん、誰にも強制などされていません。ボランティアは義務ではない。自分が行ってなにかしなければ...と思つて気がすんで、吉永先生の授業でもそこがひとつのポイントになっている。

「ボクの授業では、できるだけ現場のナマの情報をぶつきたいと考え、ビデオを多用しています。そのビデオも市販されているものではなく、自分が参加しているか、仲間がやっている市民活動の現場を編集したものがほとんどです。それからゲスト・スピーカーもとても意味がありますね。同じこと

を言ったとしても、現場で活動し、その経験を自分の問題として伝える人には迫力がある。それから学生たちをできるだけ多く活動の現場に送り出したい。そこでの経験は、授業だけではなく普段の生活にも影響するパワーがありますから」

「でも、ただ感動しただけでは講義にならないで、そのビデオに写し出された映像は何を意味しているのか、なぜ自分のこころは動いたのか、感動している自分とは何なのか、それを分析しなければなりません」

少前に「自分さがし」という言葉が流行つたのを覚えているだろうか。自分は何者か、なぜ自分は生きていくのか...。その答えをボランティア・市民活動を専門的に研究することで見いだし、社会で自分を活かす技術も身に付ける。つまり、ボランティア・市民活動を通して、自分でも知らなかつた潜在的な可能性を掘り起こし、自分の能力を社会にもわかるかたちで示せるようになってほしいと吉永先生は考えている。人のことを考えることが、結局は自分のためにもなるのだ。

「自分を学ぶことを通して、自分の生涯を発見していく。そして、その生涯の中に、自分だけじゃなく、他人や社会があるんだってことを気づいてもらいたい。人はどうして生きているのか...それは希望があるからです。希望があるから、生きる可能性を探すこともできる」

「希望を組織する」それが、ボランティア・市民活動の哲学。「この国には希望だけがない」と言われている時代だからこそ、もう一度、自分の中にある希望を探してみようだろうか。



常盤大学高等学校・新校舎竣工記念式典

生徒たちの夢を育む新校舎完成！



式典終了後、新校舎一階校長室前で胸像とレリーフの除幕式が行われた。胸像は学園創設者である故・諸澤みよ、レリーフは初代校長の故・諸澤道之介。除幕式に先立ち、諸澤正道理事長が「幕をはらってご出席の皆様方と対面されるお二人が、未永く学園の平安と発展を見守って下さることを、心より祈願するものであります」と挨拶。除幕式の後には、新校舎西側において「高野横」の記念植樹、来賓の方々には、新校舎の施設案内が行われた。

編集後記

どんな分野にも大きな転換期はやってくる。この頃の日本を見ても、政界・財界をはじめ、産業界、医学などさまざまな分野でシステムの再構築が求められている。それはもちろん学問の分野、大学も同じことだ。しかし、自らが変わっていくためには、確かな目標が必要になる。多くの人に理解される明確なヴィジョンがなければ、それを改革と呼ぶことはできない。今回掲載した「創造発展委員会」は時代の流れや社会のニーズを反映するといふより、むしろ、自らの意思で推進される改革。だからこそ、学生や教職員など全学的な問題意識の共有が必要になる。そして自分たちを見つめ問題を発見する試みが、吉永先生が言う「希望」にもつながるのではないだろうか。

* 古紙の利用・70%の再生紙を使用しています。